



県指定文化財を持つ 市内中根にある東中根大和田・^{ひがしなかねおおだ}堂山遺跡から出土した土器と紡錘車の18点が、2009年11月19日付「東中根遺跡群出土遺物」の名称で茨城県指定有形文化財に指定されました。弥生時代後期「東中根式」の標準となる資料です。東中根大和田遺跡は1971～1975年に勝田市史編纂事業の一環として学術発掘が実施され、土器等は住居跡から出土しました。指定の有無にかかわらず、土器を持つ時は、手油で表面を汚染することがないように手袋を装着し、必ず両手を使います。

(2009.12.6)

CONTENTS

第6回企画展 久慈川・那珂川流域の弥生時代墓／公開講座「ひたちなか市の考古学」第3回

虎塚古墳周辺に残る本土決戦用陣地について(石井 篤)

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第4回 常総台地研究会の設立と活動(1)(川崎純徳)

横穴墓を歩く③ 北向田・和見横穴墓群(秋谷沙織)

1ケース・ミュージアム14 ひたちなか市の紡錘車

ひたちなか市内の発掘調査 2009

ひたちなか市の遺跡⑤ 那珂湊中学区編 2

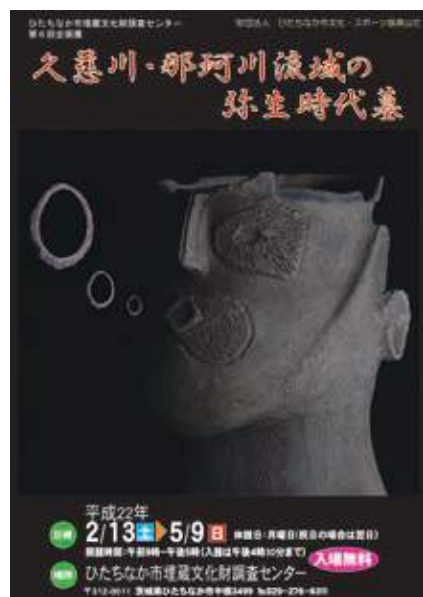
歴史の小窓④ 砥石をもとめて

虎塚古墳花便り④ キンラン

ほか

那珂川流域の弥生時代墓

2010年2月13日(土) - 5月9日(日)



公開講座「ひたちなか市の考古学」第三回「弥生時代の墓制と社会」の参考のために、弥生時代の埋葬に係った資料を集め展示することにした。ひたちなか市埋蔵文化財調査センターが所蔵する資料とともに、近隣の市町村から資料をお借りして、久慈川・那珂川流域における弥生時代の墓制の変遷が理解できるような構成を企画し、第六回企画展として開催しました。

再葬墓 弥生時代の中期前半までは、再葬墓と呼ばれる墓制が東日本に広く分布します。再葬墓とは、一次的な埋葬の後に、白骨化した遺骨の一部を土器に納めて、これを再び埋納した墓で、壺形土器が利用されることに特徴があり「壺棺再葬墓」とも呼ばれています。久慈川流域では那珂市の海後遺跡、常陸大宮市の泉坂下遺跡・中台遺跡など、那珂川流域では常陸大宮市の小野天神前遺跡など山寄りに遺跡が分布し、那珂川流域の河口付近に位置するひたちなか市域には、この時期の遺跡が確認されていません。センターには、海後遺跡から出土した二点の壺形土器が寄託されており、これは茨城県立歴史館が所蔵する人面付土器に伴ったと伝えられるものです。今回の企画展には、泉坂下遺跡の人面付土器なども借用しました。久慈川・那珂川流域の人面付土器は、粗製土器ともばれる大型の壺形土器の口頸部に人面が造形されるという特徴が認められます。泉坂下遺跡では、副葬品として滑石製の玉類が検出された土器もあります。

土器棺墓 中期後半から後期にも大型の土器が埋められた状態で検出されることがあります。茨城県の弥生時代研究には、これも再葬墓と見る風潮がありますが、県内の事例に限定しても北茨城市の足洗遺跡では土器の中から「乳幼児」の骨が検出されたと伝えられること、市内の差波遺跡では土器の中に副葬された貝輪が成人には装着できない大きさのものであること(『埋文だより』第二八号)などから、幼児までの子どもを対象に遺体を納めて埋葬した墓と考えられます。多い場合には一四点など複数の土器を埋める再葬墓に対して、土器棺墓はほとんどが単体の埋葬です。センターには、市内の差波・笠谷・御所内I遺跡など中期後半の土器棺が所蔵されています。今回の企画展には、日立市の藤ヶ作台遺跡、常陸大宮市の富士山遺跡の土器棺を借用しました。藤ヶ作台遺跡は中期後半に大型の甕形土器を、富士山遺跡は後期に大型の壺形土器を転用したものです。基本的には生活に使用していた容器の中から、土器棺は調達されます。中期後半には大型の甕形土器が生活に使用されていました。甕形土器が転用された土器棺を「甕棺」、壺形土器が転用された土器棺を「壺棺」と呼びますが、この「甕棺」から「壺棺」への変化は墓制の変化ではなく、生活に使用する容器の変化を反映したものと考えられます。市内の柳沢遺跡では、副葬品として管玉が報告されています。

第6回企画展 久慈川・



土壙墓

東水戸道路ひたちなかインター・チエンジの建設に伴う一九九三年の発掘調査により、中期後半の差洪遺跡からは、隅丸長方形あるいは長楕円形の土壙墓が検出されました。三三基の土壙墓のほとんどは、長さが一六〇センチメートル以上で、成人が膝を伸ばした伸展葬という姿形で埋葬された規模を示しています。土壙墓は、その配置からいくつかのグループに分かれます。埋葬の中心は成人であっても、土器棺墓や、小児ほどの規模を示す土壙墓が加わるグループも見られます。凝灰岩製の勾玉・管玉が副葬された土壙墓、上部に土器が供献された土壙墓もありました。南の千葉県域では再葬墓の後に方形周溝墓という墓制が出現しますが、茨城県の那珂川下流域では、北の福島県域と同じく土壙墓という墓制に変遷することが確認されました。

屋内土壙墓

二世紀を迎えて、水戸市の二の沢B遺跡、茨城町の大戸下郷遺跡の発掘調査により、後期の墓制の一端が捉えられることになりました。時期は後期も終末です。二つの遺跡では建物の内部に土壙墓が掘り込まれていました。周囲に同時期の住居跡は見当たりません。偶然に建物と墓が重なり合ってしまったのではなく、上屋を有する建物が墓のために構築されたと考えられることから、これを屋内土壙墓と呼びます。建物の竪穴部分の構造は当時の住居に似ていますが、炉はありません。床からは、供献されたと考えられる複数の土器が出土しています。炭や焼けた土が残されていて、最後には上屋が燃やされたと考えられる状況も、二つの遺跡に共通します。副葬品として、二の沢B遺跡では管玉、大戸下郷遺跡では三三点のガラス玉が検出されました。



海後遺跡出土土器（個人蔵 寄託資料）

屋内墓 仮説 中期後半の土壙墓から後

期終末の屋内土壙墓までの時期、つまり後期の墓制とは何であったのか、茨城県域では現在のところ、成人を埋葬した施設は確認できていません。ただ、屋内土壙墓を認めることにより、これに共通した住居跡があることに気がきます。大洗町の一本松遺跡では、住居跡の床から巴形銅器が出土しました。住居跡は一辺が七メートルを超える超大型です。巴形銅器ほどの貴重品が、何故に置き去りにされたのでしょうか。床には大小五点の土器も置かれていたようです。さらに、火事の痕跡も残されていました。屋内土壙墓とは異なりですが、生前の住居を墓に転化して床上に埋葬されたことを想定したくなります。巴形銅器は副葬品として、土器は供献のために置かれたのではないのでしょうか。このような状況に屋内墓という仮説を提示しました。市内の鷹ノ巣遺跡でも、超大型の住居跡から五七点のガラス玉が検出されました。これも屋内墓ではないでしょうか（八頁参照）。茨城県域では他に、石岡市の宮平遺跡からも巴形銅器が出土しています。これも本来は弥生時代後期の住居跡に所属した可能性があります。ガラス玉は、筑西市の八丁台遺跡、桜川市の加茂B遺跡、美浦村の根本遺跡などで住居跡から検出されています。屋内墓という仮説によれば、後期の墓は、存在するのに見えていないだけということになります。仮説が検証されるのか否定されるのか、今後の調査に期待しています（鈴木素行）

公開講座「市考古学」第三回

「弥生時代 墓制 社会」

二〇一〇年二月三日から三月六日の毎週土曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学」3 弥生時代の墓制と社会」を開催しました。三名の研究者をお招きし、再葬墓、土壙墓と土器棺墓、方形周溝墓という墓制について、また墓制の研究から復元される社会についてお話しいただきました。最終回には、茨城県内の事例を集成し、市内の差洪遺跡の分析を中心としながら、茨城県域の墓制と社会について研究の現状を紹介しました。



講座終了後のギャラリートーク

月/日	演 題	講 師
2 / 13(土)	方形周溝墓とその社会	市原市埋蔵文化財調査センター 大村 直氏
2 / 20(土)	土坑墓と土器棺墓	いわき明星大学 馬目 順一氏
2 / 27(土)	再葬墓と社会	駒澤大学 設楽 博己氏
3 / 6 (土)	茨城県域における弥生時代の墓制と社会	(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 鈴木 素行



市原市埋蔵文化財調査センター
大村 直氏

「社会っていうと、そういう経済的な関係だけなのか、家族ですとか今ですと会社ですとか、そういうふうな人間関係をどうやって豊かに描いていくかというようなところが、今もう一度考えなければいけないようなことだと思っております。」



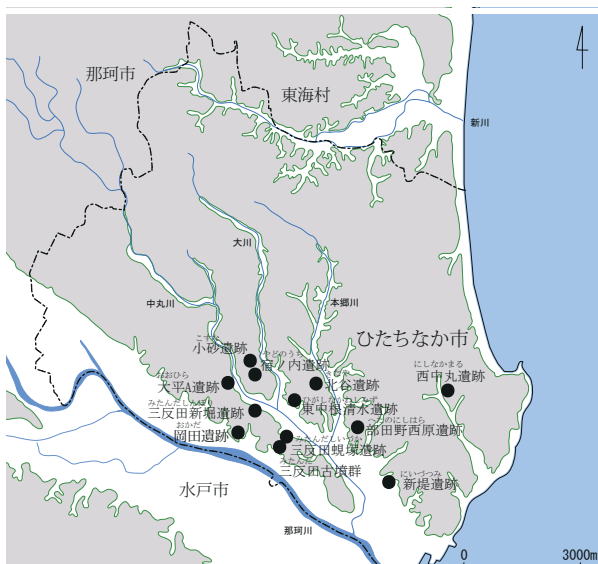
いわき明星大学
馬目 順一氏

「考古学というのは archeology といいですけども、これはどういう意味があるかという、平たく言えば、見えなくなってしまうものを見えるようにするという、学の悦びが味わえる「知の技法」であると教えられました。」



駒澤大学
設楽 博己氏

「究極の通過儀礼というのはなんでしょう。成人式はまだ、生きている間のことですから、死ぬ時もうやはり通過儀礼が必要なわけですね。祖先になるための、祖先の仲間入りの通過儀礼、これが再葬です。」



調査遺跡の位置

市内遺跡調査速報 二〇〇九年度の市内遺跡調査は、左の地図に示した二箇所の遺跡で実施されました。三反田小学校近くに位置する三反田古墳群の調査では、古墳時代前期の住居跡が三基確認されました。三反田小学校の敷地内では、過去に実施された五回の調査により、古墳時代前期の集落跡が調査されていますが、今回の調査で三反田古墳群から古墳時代前期の住居跡が見つかったことにより、古墳時代前期の集落が三反田小学校周辺にも広がっていることがわかりました。北谷遺跡の調査では、古墳時代の掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴が確認されました。北谷遺跡は虎塚古墳に近く、二つの遺跡が関係する可能性もあるでしょう。

(佐々木義則)

2009 (平成 21) 年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査月	調査回数	種別	調査内容
1	宿ノ内遺跡	中根	4月	2次	試掘	遺構・遺物なし
2	三反田古墳群	三反田	5月	1次	試掘	住居跡3基(古墳前期), 溝3条, ピット7基を確認。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土。
3	新堤遺跡	新堤	7月	1次	試掘	遺構なし。遺物は若干の弥生土器・土師器が採集された。
4	三反田新堤遺跡	三反田	7月	13次	試掘	溝2条を確認。土器細片が若干出土。
5	北谷遺跡	中根	8月	2次	試掘	ピット10基(古墳後期3, 奈良1, 時期不明6)。土師器小片が出土。
6	小砂遺跡	中根	11月	2次	試掘	溝1条を確認。遺物なし。
7	大平A遺跡	大平	11月	4次	試掘	土坑1基(平安)を確認。土師器片が出土。
8	東中根清水遺跡	中根	1月	2次	試掘	住居跡3基(古墳1基, 平安2基), ピット3基を確認。須恵器杯・土師器杯・甕などが出土。
9	部田野西原遺跡	部田野	1月	1次	試掘	遺構・遺物なし。
10	西中丸遺跡	阿字ヶ浦町	1月	1次	試掘	遺構・遺物なし。
11	岡田遺跡	三反田	3月	18次	試掘	住居跡2基(3年生1基, 古墳1基)を確認。弥生土器・土師器など出土。
12	三反田蜷塚遺跡	三反田	3月	1次	試掘	住居跡10基(古墳5基, 時期不明5基)を確認。縄文土器・土師器・須恵器などが出土

歴史の小窓 その四

砥石



古代の砥石を調べ始めた頃、京都産の天然砥石が欲しくなり、合羽橋の砥石屋に行ったことがあります。でも店主に、「あなたに使いこなすのは無理だから」といわれ、売っていただけませんでした。刃物の能力を最大限に活かすことのできる人なら、すばらしい天然砥石の力を引き出すこともできるでしょう。

写真は、ひたちなか市武田石高遺跡から出土した平安時代の砥石です。使い込んだため、真ん中(右はじの部分)が擦り減って折れてしまったようです。石材は風化した凝灰岩です。常陸大宮市を流れる諸沢川上流の河原で、現在も似た石を拾うことができますが、最近、検討し直したところ、群馬県南牧村砥沢産の可能性も出てきたので、これからの研究の進展が期待されます。古代の人々は、貴重な刃物の力を引き出す優秀な砥石を求めて山中を探索し、この石材を見つけ出したのです。

参考文献 『武田石高遺跡 奈良・平安時代編』

(佐々木義則)



この展示では、ワークショップ「ふるさと考古学」で実施した「布の考古学」の参考展示として、市内出土の紡錘車を時代順に並べ、その移り変わりをみました。紡錘車とは、糸撚りの道具である紡錘（つむ）のはずみ車です。

古代 布生産 関 道具は、多くが木製のために腐ってしまい、遺跡から出土することは稀です。ただし、石・土・鉄でできた紡錘車は腐らずに残るので、古代の布生産を明らかにするための貴重な手掛かりとなるのです。

市内出土 紡錘車は、弥生時代以後出土します。弥生時代の紡錘車は扁平で断面が楕円形のものも多く、すべて土製です。模様をもつものも多くあります。次の古墳時代前期は資料が少なく明らかなではありませんが、古墳時代中期に様相が大きく変わり、ほとんどが断面逆台形の滑石（かつせき）製紡錘車になります。これ以後、紡錘車の形は断面逆台形が主となります。



展示のようす

古墳時代後期以後には再び土製紡錘車も増えますが、断面形はやはり逆台形です。

民俗例 残 紡錘 使 方を、新潟県塩沢の中島清志さんを訪ねてお教えいただき、その際の写真も掲示しました。紡錘を回転させるツムマシという道具を用いての糸撚りを見せていただきましたが、紡錘の回転速度は想像以上に速く、驚きました。ツムマシを用いることで糸撚りの効率はかなり上がったことでしょう。また、ぶれずに高回転を維持するためには、紡錘車の重心を正確にとることが重要となったのではないかと思います。古墳時代中期以後、断面形がコマのような逆台形に変化するのには、回転速度の上昇が関係しているのかもしれませんが。（佐々木義則）



現生イノシシの骨格標本を作成中
(2009.12.25 西野国光氏より寄贈)



古代の栃木県には、那珂川と鬼怒川を中心に、それぞれ「那須」と「下毛野」という二大文化圏の存在が明らかになっています。県内では29群約300基の横穴墓が確認されていますが、そのうち27群が那珂川とその流域に分布し、那須地域独自の文化として横穴墓が展開したことがうかがえます。これらのうち、最も中核的な存在となるのが北向田・和見横穴墓群です。



栃木県那珂川町 北向田・和見横穴墓群

秋谷沙織

(栃木県立なす風土記の丘資料館)



唐御所

遺跡は那珂川の支流小口川と久那川に挟まれた丘陵斜面に位置し、推定100基以上から成る那須地域最大の横穴墓群です。中でも最高所にあり、単独で国史跡に指定される唐御所は、遺体を

納める玄室の天井部に棟木状の削り出しを造り、左右に切妻屋根に似せた勾配をもつ全国的に見ても卓越した精巧な構造で知られています。玄室内の床面にはコの字状に棺座が設けられ、造墓技術の伝播経路を想定する上でも重要な存在です。また、横穴墓の上方には墳丘の存在が指摘され、これらの特徴から那須地域で最も古く位置づけられています。

「唐御所」という名称は、平将門伝説に由来しています。将門の死後、一族を率いて和見で出家していた小高出雲守将良を頼って将門の妾が訪ねて来ましたが、すでに懐妊していた横穴墓の中で男の子を出産しました。このことを世間に隠すため、唐土帝王の妃が讒言によってこの地に流されてきたと噂を流したことから、「唐御所」と呼ばれるようになったというものです。唐御所の名は江戸時代の文献や絵図にもみられ、非常に

古い名称であることがわかります。また、この頃水戸領であった当地には、武茂郷巡村に訪れた水戸光圀公が唐御所を見学したという記録もあり、昔ながらの那須の名所といえます。

唐御所の南西に目を向けると、玄室内に木葉文に代表される線刻壁画をもつ和見遠見穴があります。県内ではこれまでに装飾をもつ古墳や横穴墓の発見例がなく、見学も可能な貴重な遺跡です。さらに、丘陵反対側の斜面には、治衛門穴と呼ばれる非常に大型で奥壁沿いに棺座をもつ横穴墓があります。那須地域最古の横穴墓である唐御所に加え、他群にはみられない特徴的な横穴墓の存在から、北向田・和見横穴墓群は、当地域の中でも特異な存在となっています。

さて、那須地域の横穴墓を考える上で注目されるのが、那珂川です。縄文時代から八溝山地を越えた茨城県域との交流を容易にし、そこから様々な地域との交流を発展させました。千年以上わたる交流から那須地域は独自の交流圏を築き上げます。横穴墓はその一端を示す貴重な遺産といえるのかもしれません。

現地は道の駅から近く、駐車場や遊歩道が整備され、横穴墓群の一部を見学することができます。ぜひ一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



和見遠見穴の線刻

中学区編②)

川子塚古墳

磯崎

平磯

三選

那珂湊二小

那珂湊二高

那珂湊文庫

那珂湊支所

那珂湊三小

首塚

鷹ノ巣遺跡

酒列磯前神社

上ノ内貝塚からは、オオツタノハ(写真左)やユキノシタ(写真右)という貝でつくった縄文時代のアクセサリーが出土しました。

鷹ノ巣遺跡第1次調査では、第26号住居跡から弥生時代後期の特徴を持つ土器（十王台式土器）と古墳時代前期の特徴を持つ土器が、いっしょに出土しました。これは、弥生時代から古墳時代への移り変わりを知ることができる、たいへん貴重な例となりました。

那珂湊中学区には、現在、77 の遺跡がみつかっています。今回紹介する那珂湊第三小学区には、35 の遺跡があります。この中には、旧石器時代の部田野西原遺跡、縄文時代の上ノ内貝塚や宮前貝塚、弥生時代の指洩遺跡、古墳～平安時代の鷹ノ巣遺跡や部田野山崎Ⅰ・Ⅱ遺跡といった各時代の遺跡が存在しています。

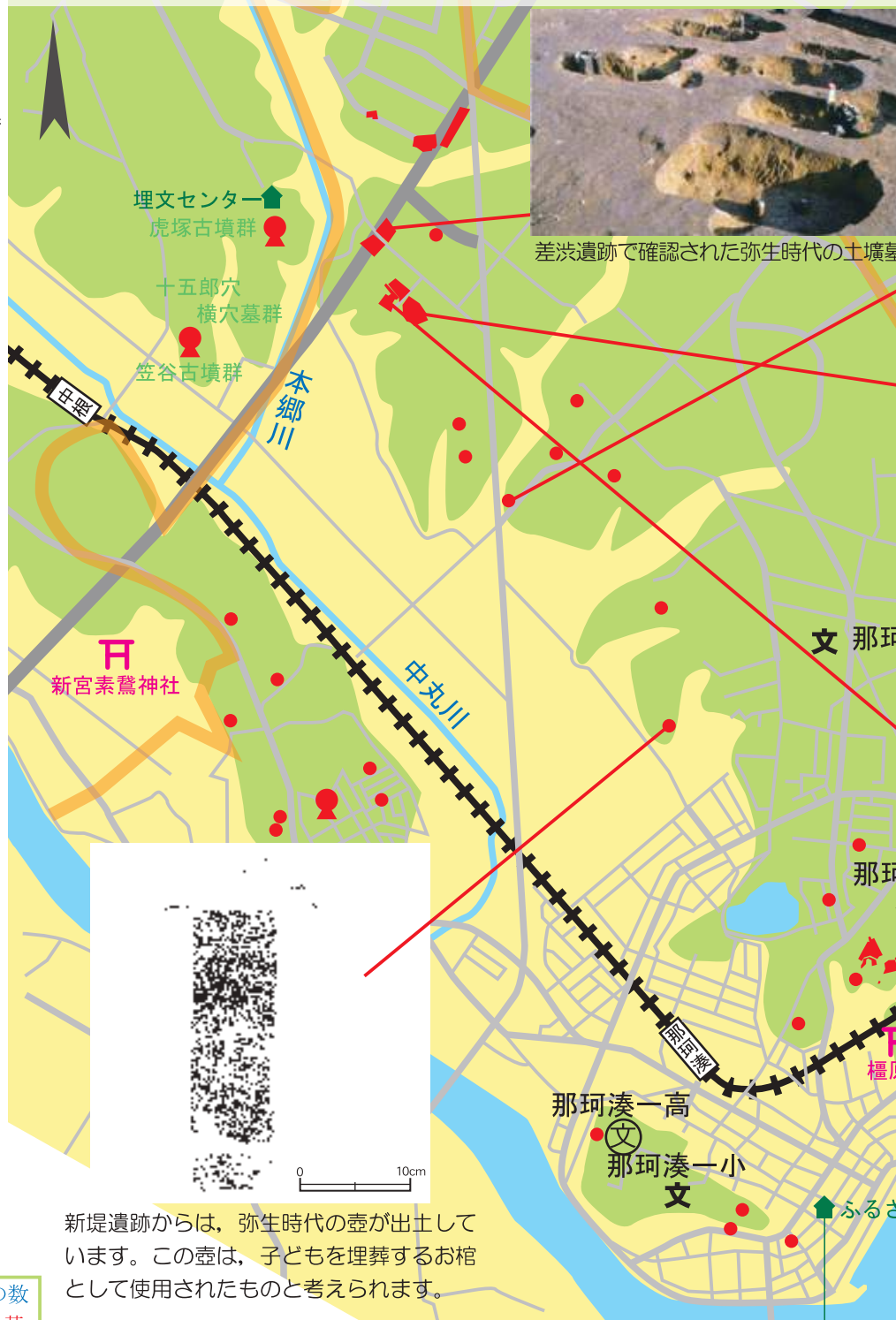
遺跡の発掘調査は、2009 年までに 21 回実施されており、弥生～平安時代の住居跡 141 基が確認されました。大規模な調査例として、1993 年に、東水戸道路ひたちなかインターチェンジの建設に伴って調査された差洩遺跡では、弥生時代のお墓である土壇墓が 33 基が確認されました。また、指洩遺跡のすぐ南側にあります鷹ノ巣遺跡では、1992～93 年と 2005～06 年に調査が実施され、弥生時代から平安時代にかけての住居跡が 68 基確認されています。住居跡からは、弥生時代のガラス玉や奈良時代の文字が刻まれた瓦など貴重な遺物が出土しています。

2009 年までに発掘調査された住居跡の数
141 基

2009 年までに発掘調査された遺跡（地図上の●印）

三小地区：神敷台遺跡、鍛冶屋窪遺跡、小谷金遺跡、上ノ内貝塚、上ノ内遺跡、鷹ノ巣遺跡、差洩遺跡、部田野猪Ⅲ遺跡、山崎遺跡、宮前貝塚、尼ヶ祢遺跡、部田野山崎Ⅰ遺跡、部田野山崎Ⅱ遺跡、部田野西富士山遺跡

ひたちなか市の遺跡 5（那珂湊中



新堤遺跡からは、弥生時代の壺が出土しています。この壺は、子どもを埋葬するお棺として使用されたものと考えられます。



ふるさと懐古館
館です。展示品
世の反射炉関係
・開館時間：午前
・休館日：月曜
・入館料：無
・電話：029-261-1111

約 12000 年前

約 2200 年前

約 1800 年前

約 1300 年前

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

奈良・

昭和三七年、茨城県教育委員会は全県的な遺跡の分布調査を実施することになり、県内の考古学・郷土史の関係者に協力を呼びかけて説明会を開いた。説明会の中で「遺跡のランク付け」が問題となった。ランクの基準はA、B、Cに分けるというものであった。これに対して「ランク付け」は行うべきではないという意見や「ランク付けは困難」という意見があった反面、すべての遺跡の保存はできないからランク付けによって重要遺跡は保護すべきものという主張があった。Aランクは国や県の史跡として永久保存だという考えが示された。共通理解のために全員で鹿島地方の遺跡を回ろうということになり踏査することとなった。ランク付けは平行線のままであった。

説明会終了後、水戸駅前前の喫茶店で諸星政得先生とこれからの考古学研究の在り方について話し合った。同好の士を募り共同研究を進めることや会員それぞれの専門分野について会として協力していくことなどを話し合った。研究会は学閥を排除し、だれでも自由に会員になれることや会員の専門分野を尊重しクラフトマンを育てていくこと。遺跡の保護・保存に尽力していくことなどが骨格として決まり具体的な研究会の設立に向けて進めることとなった。

我々とは別に佐藤次男氏、伊東重敏氏らを軸に新たな研究組織結成の動きが生まれていた。

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第4回 常総台地研究会の設立と活動(1)



1967(昭和42)年 取手市上高井貝塚の分布調査



川崎 純徳

この具体化が「茨城考古学会」であった。これはご両人の長年の夢である「研究者の大同団結」「学閥の打破」「研究資料の公開」の具体化であった。こうした考えは我々の考えとも一致していたから、研究会のことはしばらく休止して、茨城考古学会に参加することにした。茨城考古学会は伊東・佐藤氏の理念とは別に、鹿島開発などを中心とした地域開発に対する受け皿とする考えが間もなく主流となる。その最初の現れが宮中野古墳群きゅうちゅうのの発掘であった。宮中野古墳群はランク付けに当たっては佐藤・伊東氏を含めて「開発に対する受け皿の必要性」に配慮してきた人たちも鹿島地域唯一のAランクとした遺跡であった。当然、茨城考古学会の理事会は紛糾した。それを押し切って発掘は強行された。こうして我々も研究会発足に向けて歩を進めることにしたが茨城考古学会を脱会したり分派をつくるのではないから会の名称に「考古学」という文字を用いないこととし「常総台地研究会」(略称・常台研)とすることにしたのである。昭和四一年発足、四二年に機関誌『常総台地』刊行。会の共同研究テーマは「縄文土器製塩の研究」とし、先土器、縄文、弥生、古墳の各時代の会員研究については会及び会員が協力していくこととなった。

＊川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一回(『埋文だより』第二九号)に掲載してあります。

とらづか 虎塚古墳周辺に残る本土決戦用陣地について

石井 篤



第1号坑道開口部（開口部A）

太平洋戦争の末期、連合軍の日本本土上陸を迎え撃つ「本土決戦」の準備として、海岸部に多くの砲台・銃座・弾薬庫といった陣地施設が構築されました。虎塚古墳の東側一帯にもそのような陣地のひとつが残されています。複数の遺構の配置を検討した結果、街道を進む敵を待ち伏せして攻撃するための陣地である可能性が高いことが判明しました。

太平洋戦争の末期、連合軍の日本本土上陸に備えて、多くの日本軍部隊が太平洋沿岸部に展開した。茨城県沿岸部にも、少なくとも十万人を超える部隊が展開し、陣地構築をはじめとする準備作業に当たった。この陣地構築は、周辺住民を動員するなどして大規模に行なわれ、現在までその痕跡を各所に残している。

しかしながら、その内容については、各市町村史にも断片的な記述が残るのみであり詳細は不明となっている。また近年、地下壕での事故死などもあって、埋戻し等によって失われる陣地が増加しており、早急に記録を行なわなければ、まったく知られないままに埋もれていくものと思われる。

本編においては、関東地方における本土決戦の作戦計画について概要を述べるとともに、ひたひたなか市内に残る本土決戦陣地群の中でも、比較的保存状態がよく、陣地全体の編成や戦法について推測する事が可能である虎塚古墳・埋蔵文化財調査センター周辺の陣地について紹介する。

本土決戦 作戦計画

日本の敗勢が濃くなり、戦線が本土に接近するにつれて連合軍の上陸に対する懸念が高まり、昭和十九年七月より九州の一部で陣地構築が開始された。茨城県沿岸においても、昭和十九年一〇月に留守第五十一師団に対して陣地構築の命令が下された。この陣地構築作業は、

翌昭和二〇年三月末に大阪から第四十四師団主力が到着するところから本格化した。

昭和二〇年四月八日、陸軍は本土決戦に関する作戦計画である「決号作戦準備要綱」を発令した。決号作戦は、連合軍の上陸箇所によって決一号から決六号までに分かれており、関東地方における作戦計画は決三号作戦と呼称された。

上陸する連合軍は火力において優越していると考えられたため、それに対抗するための陣地構築はきわめて重要視された。陣地の内容については昭和二〇年三月一六日付けで示された「国土築城実施要領」に詳しく定められており、個々の陣地については、艦砲射撃・空襲に対抗するため、地下式・洞窟式とすることが徹底されていた。

なお、こういった洞窟式陣地は、一般的に「地下壕」と呼ばれることが多いが、日本陸軍の用語では「坑道」であり、本編においても基本的には「坑道」の語を使用する。

中根指洗陣地

本項では市内に残存するものうち比較的良好に残存している陣地について詳述する。

虎塚古墳及び隣接するひたひたなか市埋蔵文化財調査センターの東側には、本郷川が流れており、谷となっている。谷の西側斜面は、ところどころ凝灰岩の露頭があり、その露頭を掘り込んで作られた十五郎六横穴墓群がひろがっている。

陣地遺構は、本郷川西岸の斜面部及び東岸の台地上に存在する。本編においてはこの陣地を

付近の小字名から「中根指洪陣地」と呼ぶ。中根指洪陣地において現在確認されている遺構は、坑道一、塹壕一の計二基がある。

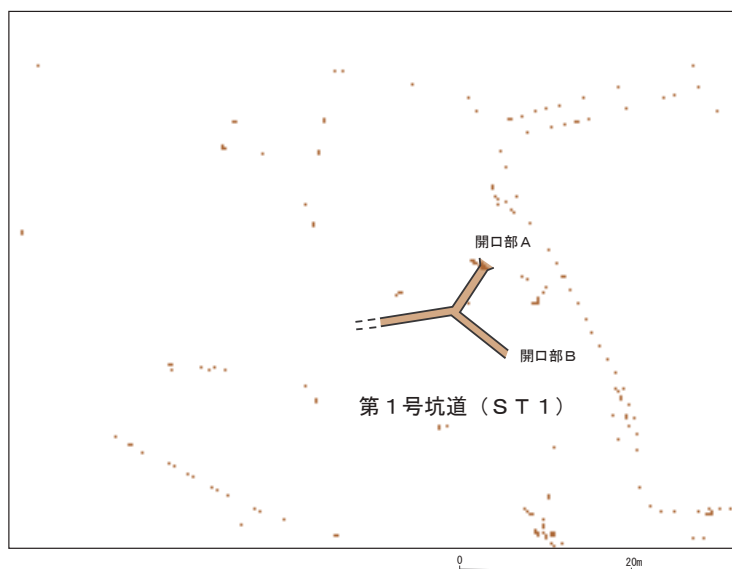
陣地跡の付近を南東から北西に向かって走る市道一―一九号線は、那珂湊方面から中根へと抜ける当時の幹線道路であった。当時は阿字ヶ浦方面からひたちなか市の中心部へと向かう道路は限られており、この道路も連合軍の主要進撃路の一つになるものと想定される。よってこの陣地は、この道路を進撃する連合軍部隊を攻撃するために築造されたものと推測される。以下に各遺構について述べる。

第一号坑道（一）

第一号坑道は、埋蔵文化財調査センターの直下の斜面に開口する坑道である。開口部は二箇所あり、全体の形状はY字状を呈する。北側の開口部Aの規模は幅二・六m、高さは一・〇mで潰れたカマボコ型を呈する。開口方向は北東を志向する。開口部Bは半ば崩落状態であり、正確な形状は不詳であるが、Aよりも小規模に見える。坑道はY字の合流点までは天井が低く、幅一・二m、高さ〇・八m、合流点より奥は幅はやや狭く天井が高くなり、幅一・〇m、高さ一・四mとなる。合流点より奥については、坑道内が冠水しており、合流点から目視できた約十mより先については未調査である。また坑道は開口部から合流点に向かって下降しており、開口部より合流部は約〇・六m低くなっている。開

口部Aの前には、直径一・九m程度の円形のくぼみがある。坑道内の壁は凝灰岩で、強度が高く落盤等の痕跡もない。残存状況は非常に良い。開口部が大きく掘り広げられていることから、本坑道は、開口部から射撃を行なう掩体（銃座・砲台）であるものと考えられる。市道一―一九号線とほぼ直交する方向に開口しており、道路を進む敵部隊の側面に射撃を行なうことが可能である。

本坑道に配置される予定だった兵器については不詳であるが、道路を行く車両の側面を射撃



第1図 第1号坑道（ST1）

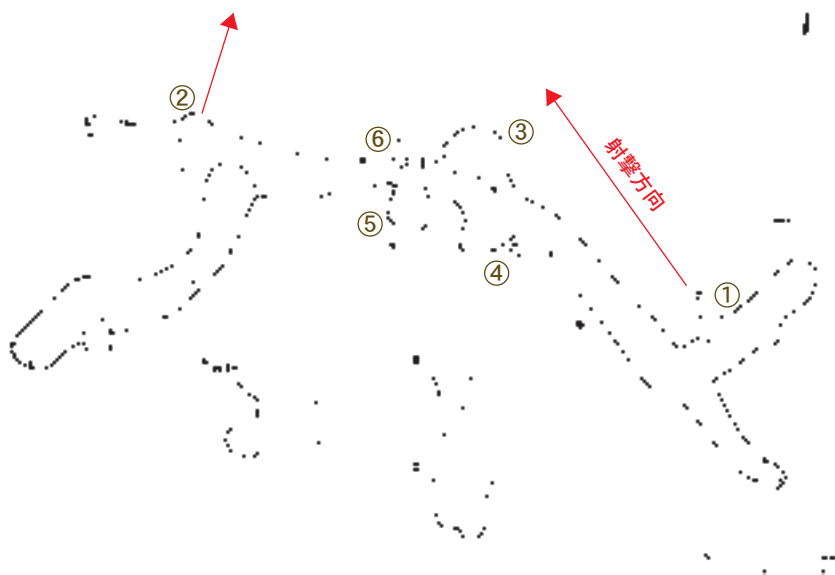
できる位置から考えて、対戦車用の火砲である九四式速射砲、あるいは坑道の規模の小ささから、重機関銃の可能性が考えられる。

第一号塹壕（一）

第一号塹壕は、本郷川の東岸の台地上に存在した遺構である。平成五年度に、茨城県教育財団による差洪遺跡の発掘調査によつて発見され、「第1号防空壕跡」として報告されている。以下にその形状について教育財団の報告を元に述べる。

遺構は調査区の南西隅の台地の縁辺部から検出された、北西から南東に向けて延びる溝状のもので、全長は約四十mを測る。断面は細長い逆台形状で上端の幅は約一・〇～一・八m、下端の幅は約〇・三～〇・八m、深さは確認面より一・七～二・〇mである。教育財団の報告書ではトンネルと解釈されているが、断面形状から考えて、溝状であったと解釈したい。壕の両端に近い位置にそれぞれ一箇所ずつ、途中に段を伴う張り出し（第2図の①・②）が、壕の中央部には段を伴わない張り出しが三箇所（第2図の③・④・⑤）、地下式の横穴が一箇所（第2図の⑥）存在する。壁面の中位には四箇所、小さな平場が設けられており、教育財団の報告書では「ロウソク置き」と解釈されている。

①・②は、射撃用の掩体と思われる。実測図が詳細ではなく、確定的なことはいえないが、小銃・機関銃用としては深すぎるため、重擲弾筒用の掩体と推定する。重擲弾筒は重さ約八百



第2図 第1号塹壕 (S X 1)

gの砲弾を曲射弾道(山なりの弾道)で発射する手持ち式の小型迫撃砲であり、本土決戦用師団の歩兵中隊には九基、挺進中隊には十二基が配備された。射程は最大約六百mであった。③・④・⑤・⑥は、壕内の待避所である「掩坑」と思われる。壕内に砲爆弾が落下した際や、壕が側面から掃射された際の退避に使用する。四箇所の「口ウソク置き」については、壕外へ進出するための

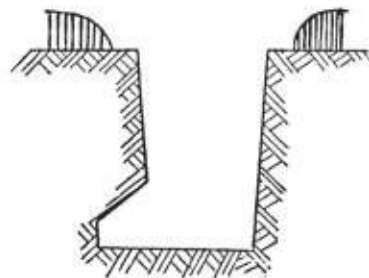
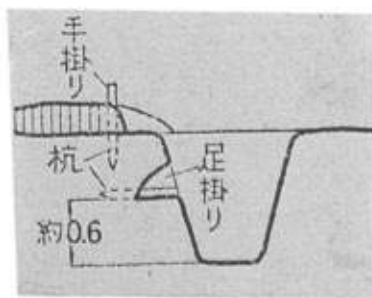
「足掛り」であろう(第3図参照)。

なお、本塹壕は、発掘調査後に高速道路のインターチェンジ建設のため破壊され、現存しない。

この二つの遺構を総合的に検討していくと、この陣地構築の際に念頭に置かれていた戦術が推測できる(第4図参照)。陣地戦においては、火力の集中する地域(キルゾーン)を設定し、そこに敵部隊を誘い込んで、打撃を与えることが基本的な戦術となる。その観点から見ていくと、坑道からの射線と塹壕からの擲弾筒の射線が交わる、道路が谷に差し掛かる部分が、この陣地のキルゾーンとして設定されていることがわかる。低地は周辺から視認されやすく、道路を外れると水田で、遮蔽物もない。また擲弾筒は、ほぼ敵部隊の進行方向の真後ろから発射される形になっており、退路を断たれた形の敵部隊は大いに混乱することになる。

第一号塹壕には嚴重な偽装を施して敵部隊の先頭をやり過ぎ、谷部に差し掛かった時点で、一斉射撃を行なう予定だったと思われる。またこの地域に配置される予定であった部隊は、重火器をあまり保有しない代わりに身軽である挺進中隊であり、本陣地は本格的な抵抗よりも、時間稼ぎと敵の消耗を主な目的とした陣地であった可能性が高い。本格的抵抗は、長堀町・東石川周辺に構築されたより強固な陣地が受け持ったものと思われる。

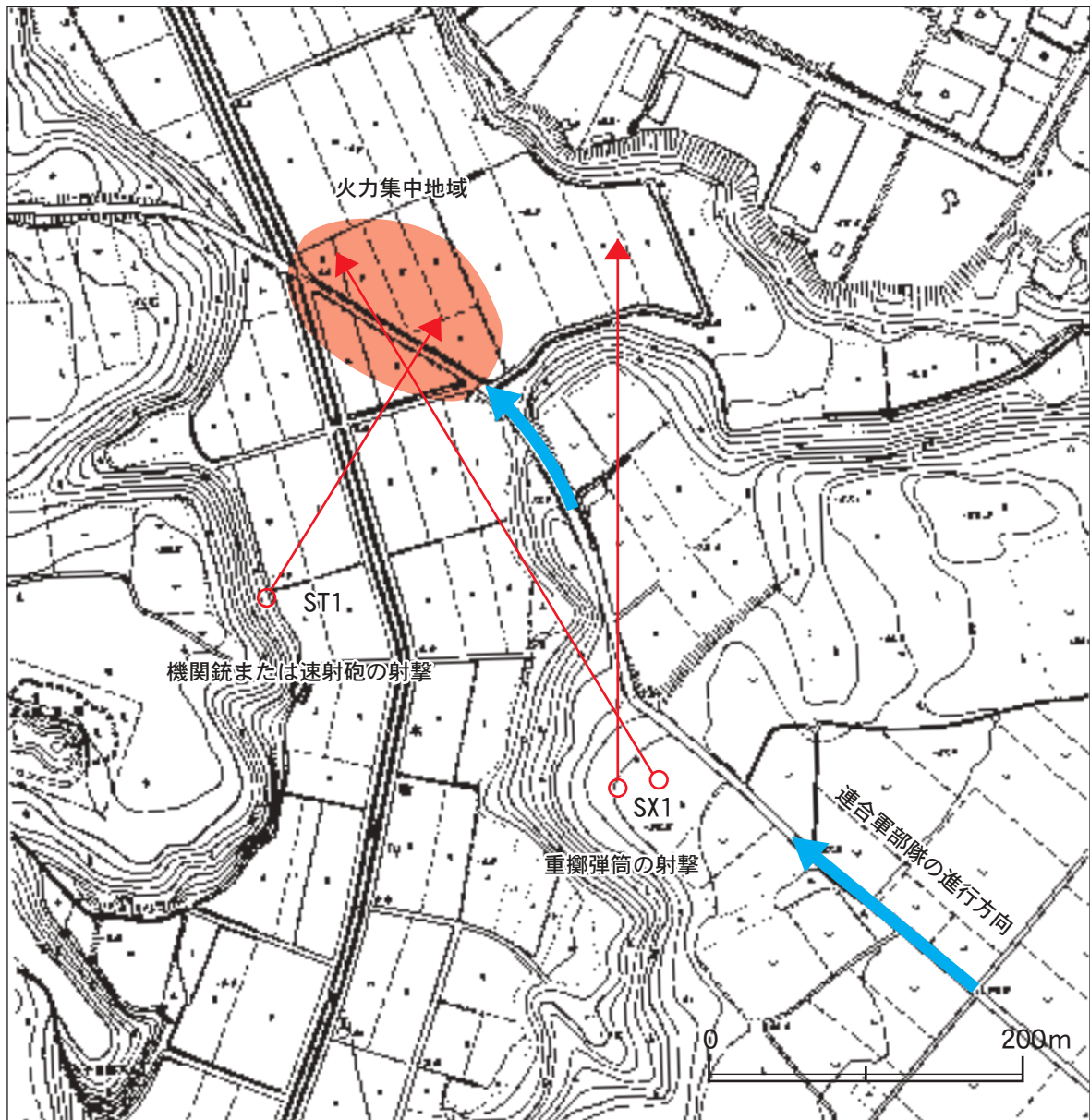
用 臥 伏
(ノモルタケ設=壕通交)



第3図 掩坑・足掛り概念図

本編においては、二つの遺構の関連性から、陣地構築の意図を探ることを試みた。

今回紹介した中根指渉陣地のほかにも、ひたちなか市内には各所に坑道式の陣地が所在する。それらの陣地跡について紹介するとともに、陣地群間の関係について、大隊・連隊といったより大きな規模の部隊の作戦計画と結び付けて説明していくことを今後の課題としたい。



第4図 陣地遺構配置図

主 参考文献

陸軍歩兵学校編一九四〇『歩兵教練の参考 第三巻』／防衛研修所戦史室一九七一『戦史叢書51 本土決戦準備(一)』朝雲新聞社／茨城県教育財団一九九四『差込遺跡 一般国道六号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』／アメリカ陸軍省編一九九八『日本陸軍便覧』光人社／伊藤厚史一九九七『愛知県東部における本土決戦準備(一)』『三河考古』第十号／伊藤厚史二〇〇三『愛知県東部における本土決戦準備(七)』『三河考古』第十六号／伊藤厚史二〇〇六『豊橋市内に残る戦争遺構 ー本土決戦陣地を中心にー』『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第七十八集 市内遺跡詳細分布調査報告書』

以下 防衛研究所図書館所蔵史料

一九四三『野戦築城教範総則及第一部』／一九四三『野戦築城教範第二部』／一九四四『野戦築城教範第一部補遺』／一九四五『坑道陣地ノ参考』／一九四五『第五十一軍状況報告』／一九四五『第五十一軍鹿島洋方面築城施設要図 其の一』

図版 出典

第1図 平成二十年度十五郎穴横穴墓群測量調査成果図をもとに一部改変／第2図『差込遺跡 一般国道六号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』所載の実測図を一部改変／第3図右『歩兵教練の参考 第三巻』左『野戦築城教範総則及第一部』防衛研究所図書館所蔵史料

文の々 埋センターの日 2009 後期

10月

一 国立歴史民俗博物館企画展「縄文はいつから」へ資料貸出【後野遺跡出土他】／ワンケースミュージアム14「ひたちなか市の紡錘車」開始／茨城県文化保護審議委員会／茨城県立歴史館特別展「かがやきにこめた権威と荘厳」へ資料貸出【虎塚古墳銀装小大刀】／4クラブツームリズム新宿見学／6 茨城県自然博物館より資料返却／9 ひたちなか市市民憲章推進協議会文化部会見学／10 九州古代史の会見学／11 なす風土記の丘資料館見学／12 葛飾区「柴又かつしか教室」見学／13 虎塚古墳石室点検／14 小美玉市玉里史料館参考展「百里原の戦跡遺跡」へ資料貸出【武田遺跡群戦時遺物】／16 水戸市国田小学校6年生社会科見学／20 茨城放送⑦「石製模造品」／22 佐野中学校職場体験／27 行方市羽生小学校6年生見学／笠間市常陸万葉の会

見学／28 兒玉まどか氏（明治大学大学院生）資料閲覧【鷹ノ巣遺跡他】／30 熊本県立装飾古墳館企画展「茨城県の装飾古墳」へ資料貸出【虎塚古墳鉄器他】／中根小学校2年生社会科見学」



11月
二 『埋文だより』第31号発行

一 ふるさと考古学⑧「壁面の考古学」（講師・堀江武史氏）／市内施設ミニコンサート（オカリナ野口喜広氏・キーボード他矢野恵子氏・ひたちなか市文化・スポーツ振興公社主催）



4-5 小砂遺跡試掘調査／5 中コミセン歴史講座見学／6 田彦小学校3年生社会科見学／7 ふるさと考古学⑨「布の考古学2」（講師・青木光恵氏）



／12 中コミセン家庭教育学級見学」



二 茨城放送⑧「東北からの頁岩」／ふるさと考古学⑩「フィールド探検」（講師・矢野徳也氏）／21 葦崎ライオンズクラブ見学／23 ひたちなか市史跡保存対策委員会／葛飾区「柴又かつしか教室」見学／23-24 虎塚古墳石室点検／24 なす風土記の丘より資料返却／26 中根小学校1年生どんぐり拾い／樹木への名札付け」



26-27 大平A遺跡試掘調査

虎塚古墳 花便り

4 キンラン

今回は、虎塚古墳に咲く花で最も貴重なものと思われるキンラン（金欄）です。名前は黄色の花から付けられました。

このランは、山や丘陵の林の中に生育します。花は、高さ三〇〜七〇cmの茎の先端に、直径1cm程度の明るく鮮やかな黄色の花を房状につけます。花は全開せず、半開き状態のままであることが多いです。虎塚古墳では、初夏の時期、雑木林の木漏れ日に照らされて花の輝く様を見ることが出来ます。

しかし、最近は花の咲く時期に採られてしまうことがあり、数本しか見ることができなくなりました。この花は、一九九七年に絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト）に登録されている貴重な植物です。花の色が黄色という虎塚古墳にピッタリのこの花。見つけたときには、そっと見守ってあげてください。（稲田健一）



／28ふるさと考古学⑩「石の考古学2」（講師・篠原祐一氏）



29ワンケースミュージアム14終

了／外野小学校へ資料貸出【武田遺跡群砲弾破片】／一中学区健歩会見学

12月

ふるさと考古学⑫「やつぱり楽しい考古学」（講師・さかいひろこ氏）

9 黒澤彰哉氏（県立歴史館）資料閲覧【鉾ノ宮古墳他墳輪】／12 西

野国光氏寄贈資料受入【現生猪頭部】

15 茨城放送⑨「須恵器のはなし」

23ワンケースミュージアム15

「佐藤次男考古学資料Ⅲ」開始／

24 西野国光氏寄贈資料受入【現生猪骨格一頭】／25 猪骨格標本作成開始

1月

5 堀二六氏寄贈資料受入【高野・向野地内石斧】／7 熊本県立装飾古墳館より資料返却／13 小美玉市玉里史料館より資料返却／

14-20 東中根清水遺跡試掘調査

／19-20 部田野西原遺跡試掘調査

／19 茨城放送⑩「似て非なる墓」21-22 西中丸遺跡試掘調査

2月

4 加賀市議会視察／二谷畑美帆氏人骨観察【三反田堀塚貝塚他】／12 行田市埴輪の館見学／13 公開講座①「方形周溝墓とその社会」（講師・大村直氏）／14 ワンケースミュージアム15」終了／16 茨城放送⑪「今年の干支にちなんだ古墳―虎塚古墳―」／20 公開講座②「土坑墓と土器棺墓」（講師・馬目順一氏）

／21 八街市11町内安全パトロール隊見学／27 公開講座③「再葬墓と社会」（講師・設楽博己氏）

3月

3 小林恵子氏寄贈資料受入【小林三郎先生虎塚関係資料】／5 ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画展「空の旅人」へ資料貸出【三反田堀塚貝塚オジロワシ】／6 公開講座④「茨城県域における弥生時代の墓制と社会」（講師・鈴木素行）／公開講座「ひたちなか市の考古学」第2回記録集『装飾古墳の世界』発行／11-12 岡田遺跡試掘調査／12-17 三反田堀塚遺跡試掘調査／ニクラブツリーズム見学／13 青

入館者状況 (2009.10.1～2010.3.31)

月	開館日数	個人(人)	団体(人)	計(人)
10月	27	228	11	249
11月	25	186	13	200
12月	24	141	1	142
1月	24	149	0	149
2月	24	109	6	115
3月	26	557	6	563
計	150	1370	37	1407

() 内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business2.plala.or.jp/h-bunspo/>

31『武田遺跡群総括・補遺編』（公社報告第40集）・平成21年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書・埋文だより」第32号発行



山博樹氏（福島県文化振興事業団）資料閲覧・撮影【武田遺跡群】／16 茨城放送⑫「古代の鉄はどんなふうにつくったのか」／25-28 虎塚古墳石室内彩色壁画一般公開



編集後記の笑つ埴輪

「ふるさと考古学」では、土器に触れることを体験する。これは、土器の表面を撫で、重さを感じるために少し浮かせる程度のことだ。今号では、東中根大和遺跡から出土した土器を表紙に掲載するため、土器を持つモデルを選ぶことにした。「喜色満面」が表現できるのは、やはりケンタだろうと考えて、講座の終了後に撮影を依頼する。

場所は標本陳列室。白い手袋を装着し、エプロンを着けてもらう。これが「東中根式エプロン」と気付く人がどれ位いるだろう。「細かすぎて伝わらない」か。大事な土器だから落とさないようにと念を押す。押し過ぎたせいか、緊張のあまり満面の笑みが消えてしまった。目は笑うようになっても、口の周りの強張りがなかなか解けない。どうか「喜色八分目」あたりで撮影は終了した。それにしても、見る者まで楽しくさせてくれる笑顔の持ち主だ。

傍で見ていたタクミが自分も持ってみたくて言い出した。なかなか様になつているので写真を撮ろうとすると、ケンタが入ってくる。「喜色」だけでなく、主役の座を奪われる危機にも敏感なケンタなのであった。



ひたちなか埋文だより 第32号

編集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

2010年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター